

人生最初のリミナリティ体験の考察 —幼児期の子どもたちが姉・兄になるときを描く絵本を通して—

正置 友子*

要約

人は、その誕生の時から往生の時まで、生きてあることの喜びを経験もするが、一方、生きることの痛みを伴う経験をすることも予定されている。人生の出発点である幼児期においても、成長の節目に伴う痛みを経験する。不慮の不幸が襲い掛かることもあるが、ひとつの人生を生きるということだけで越えなければならない「敷居」がある。この敷居を超える時期、すなわち、敷居のこちら側からあちら側へと超える期間を、“リミナリティ期”という。リミナリティは3つの段階を通過する。分離、通過（敷居、狭義のリミナリティ）、再統合である。

長い人生の過程で、人はリミナリティ期を何度も通るが、本論では、幼い子どもたちが「姉・兄になるとき」をテーマとして扱っている絵本を選び、子どもたちが、家族のなかに突如としてあらわれた新しい存在（自分のそれまでの位置を奪う競争相手）を認め、家族における自分の新しいポジションを受け入れ、誇らしい姉・兄として成長していく過程を考察する。その姿は、人生最初の試練を乗り越えていくときの、けなげで、ほほえましい場合もあるが、往々にして、痛ましいほどの心理的葛藤の様相を呈する。

絵本は子どもたちにとって役に立つ文化財であるが、本論では、幼児期の子どもが姉・兄になるときに体験する“リミナリティ”を絵本という総合芸術作品を通して考察する。

キーワード：絵本 リミナリティ 試練 姉兄になること 子どもの心理

2020年9月30日受理

1. はじめに

人は、その誕生の時から命尽きる時まで、生きてあることの喜びを経験もするが、一方生きることの痛みを伴う経験をすることも予定されている。人生の出発点である幼児期においても、成長の節目に伴う痛みを経験する。不慮の不幸が襲い掛かることもあるが、ひとつの人生を生きるということだけで越えなければならない「敷居」がある。この敷居を超える時期、あるいは、敷居のこちら側からあちら側へと超える期間を、“リミナリティ”という。

文化人類学者であるヴィクター・ターナーは著書『象徴と社会』（1981）のなかで、liminality という語はラテン語の「敷居」を意味する“limen”に由来していると書いたうえで、「このラテン語は、まさに通過者が通り過ぎる地点としての周縁の段階を象徴している。さらにいえば敷居とは、この場合、なにも実際のそれにかぎらず、象徴的なものでもある。このように、周縁にリーメンという言葉をあてるのも悪くはないが、クニクラーcuniclar<トンネルのなか>といったほうが、周縁段階に特有の暗示的な神秘性と

*大阪健康福祉短期大学
連絡先：正置友子（まさきともこ）
〒590-0075 堺市堺区南花田口町2丁3-20
大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科
E-mail: tomoko-m@fk9.so-net.ne.jp

暗黒性にふさわしいかもしれない。」と書いている。

1

リミナリティの状況は、それぞれの置かれた状態によって、象徴的なメタファーが違って来るだろう。敷居の代わりに、深い谷川にかかる長い橋であったり、暗いトンネルであったりする。あるいは、薄暗がりにおオカミが潜む峠かもしれない。リミナリティとは、そのような象徴的な言葉に置き換えて表現できる、人生の過渡期であり、それは、ほとんどの人に訪れる試練とも言えるだろう。それが子どもである期間に訪れる場合には、成長の可能性を秘めた試練と言える。

長い人生の過程で、人はリミナリティを何度も経験するが、本論では、幼い子どもたちが「姉・兄になるとき」をテーマとして扱っている絵本を選び、子どもたちが、家族のなかに突如としてあらわれた新しい存在（自分のそれまでの位置を奪う競争相手）を認め、家族における自分の新しいポジションである姉・兄としての役割をどのようにして受け入れていくか、その過程を絵本を通して考察する。その姿は、人生最初の試練を乗り越えていくときの、けなげで、ほほえましい面もあるが、往々にして、痛ましいほどの心理的葛藤の様相を呈する。

2. リミナリティとは

リミナリティという用語は、文化人類学において通過儀礼を研究する段階で使われるようになった。子ども時代（社会）からおとな時代（社会）への移行の儀式をその代表例とする。しかし、通過の儀礼は、子どもからおとなへの移行期だけに限られたものではないことを、ヴァン・ジェネップ（1873-1959）は、著書『通過儀礼』の中で次のように書いている。

いかなる形態の社会においても、ある個人の人生は、ある年代から他の年代へ、ある種の仕事から他のものに移る（passer）一連の通過で成り立っている。…… 一つの特異社会から他の特異社会へ、またある状態から別の状態への通過は、生きてい

るという事実の要請によるものであるから、人の一生は同じような始まりと終わりを伴う一連の各段階の継続によって成立している。²

ジェネップが列挙している一連の各段階をまとめてみると、次のようになる。誕生、幼年期、思春期、婚約、結婚、妊娠、父親になること、階級昇進、職業的専門化、死、葬送などである。現代における通過の段階としては、ここに、進級、進学、受験、病気、失職、退職、老齢も含むだろう。どの段階も、「生きていくという事実の要請」によるものである。

さらに、ジェネップは、一つの通過儀礼を取り上げて分析を行い、一つの通過儀礼は三つのステップを通ることを提示している。分離儀礼（separation）、移行儀礼（liminality, margin）、合体儀礼（reintegration）である。狭義のリミナリティは、真ん中の移行の段階を指すが、広義のリミナリティは、3つの段階を経ることによって完了する。³

後の文化人類学者であるヴィクター・ターナー（1920-1983）は、著書『儀礼の過程』（1996）の中で、リミナリティについて、ヴァン・ジェネップにも触れつつ、次のように書いている。少々長いですが、リミナリティを理解する上で役に立つ文章であり、幼児期の子どもたちのリミナリティを理解する手だてともなるので引用したい。

ヴァン・ジェネップは、通過儀礼ないし“移行”の儀礼はすべて、分離 separation・周辺 margin（あるいは limen、ラテン語で“敷居”を意味する）・再統合 agregation の三段階によって特徴づけられることを示している。この第一の（分離の）段階には、社会構造のなかに定められていた以前のところ、あるいは、文化的諸条件のセット（“ある状態”）からの、ないしは、その両者からの、個人あるいは集団の分離ということの意味する象徴的行動がある。中間に介在する“境界”の時期では、儀礼の主体（“通過する者”）の特徴はあいまいである。かれは、それ以前の状態あるいはその後に来るべき状態の特

徴をわずかしか、ないしは、全然もたない文化領域を通過する。第三の再統合ないし再加入の段階で通過は完了する。儀礼の主体は、個人であれ集団であれ、ふたたび相対的に安定した状態にあり、そのために、他者に対して、明白に規定されている“構造的な”型の権利と義務を持っている。かれは、かかる地位の体系において、社会的地位を占めるものに結びついている慣習的な規範と倫理的基準に則して行動するように期待される。⁴

通過儀礼の世界的研究者として双璧を成すヴァン・ジュネップとヴィクター・ターナーのリミナリティを纏めて見ると、二人とも、リミナリティは、3つの段階を通るとしている。

第一段階として「分離」があり、第二段階として「通過」（「移行」、「境界」）があり、第三段階として「再統合」がある。狭い意味のリミナリティは第二段階の通過期を指すが、ひとりの人が自分のアイデンティティの危機を乗り越えて自己の再統合を果たし、その社会のなかで生きていけるようになるには、3つの段階を経て初めて可能になる。

もし人生の過程で、第一段階の分離という痛ましい経験をし、移行あるいは通過することができず、自己の再統合を図ることができなければ、その人の人生はそこで破綻することになり、精神的、身体的な危機状態に陥ることになるだろう。

上記の引用箇所、ターナーが、第二段階の境界あるいは通過の時期には、主体者の特徴は曖昧であり、その前の状態もその後の状態も定かではないし、どちらにも属してはいない、と記していることは非常に重要である。

この文章が対象としている人生の重要な時期は、子どもからおとなになるときの通過儀礼であり、それは人生最大のリミナリティであるが、誕生から死までの期間に、生きている限り出会うリミナリティを理解する上で役に立つリミナリティ定義である。本論における幼児期の子どもたちのリミナリティ状況を考察するときにも、大きな役割を果たす。

3. 乳幼児期の子どもたちと絵本を読むプロジェクト「だっこでえほんの会」について

私は、子どもたちにとって絵本や本との出会いの広場と言える青山台文庫を1973年に大阪の千里ニュータウンで開設した。50年近く、幼児期の子どもたちや学齢期の子どもたちと絵本を読み、詩を読み合い、読書会などをして来た。文庫の一つのプロジェクトとして、2001年より乳幼児期の子どもたちを対象として「だっこでえほんの会」をスタートした。

1990年代より、文庫にやってくる子どもたちの年齢が低年齢化していく現象が全国的にあらわれた。ひとりで、あるいは友だちとやってくる学齢期の子どもたちが激減し、乳幼児期の子どもたちが母親に連れられてやってくる数が増加していった。また、2000年は政府主導で「子ども読書年」として制定され、東京上野に国際子ども図書館が設立された。イギリスでは1992年にあかちゃんの時から親と絵本をシェアしようという提唱で始まったブックスタートが、日本でも2001年にスタートし、日本中の自治体へと広がっていった。私は、イギリスでの6年間の絵本研究を終え、ヴィクトリア時代の絵本をテーマとした博士論文を仕上げ、2000年に帰国した。⁵

6年間に毎年短期の日本滞在を繰り返してはいたが、一種の浦島太郎的状态にあり、帰国時に目の前にした日本の変質に衝撃を受けた。2000年には少年による凶悪犯罪も起こっていた。⁶ 子どもたちをめぐる社会、文化の環境は、未来を担う子どもたちのためというよりは、子どもたちを商業主義のターゲットにするという社会現象が拡大していた。図書館では、委託の制度が広がり、専門職の司書は姿を消しつつあった。

そのような中で青山台文庫に復帰した。その時点でスタートしたのが、乳幼児を対象にした絵本の会「だっこでえほんの会」であった。もう一度、あかちゃんからスタートしよう、と考えた。乳幼児期からの「ひとりかた」の大事さを思った。⁷

「だっこでえほんの会」は、0歳から3歳くらいま

での子どもたちとおかあさんたちとの絵本の時間である。年齢別になっており、「0歳組」、それから「1歳組」、次いで「2歳組」に参加し、みんなが3歳になった春3月に「だっこでえほんの会」を卒業する。ほとんどの子が3年間、月に2回、通うことになる。私にとっては、子どもたちが誕生から3歳に成長するまでを、絵本を通して時間と場を共にするとう得難い会となった。

4. 幼児期に、姉・兄になるとき

「だっこでえほんの会」の20年間、乳幼児期の子どもたちは、絵本にどのように出会うかを、人生最初の時期の激動的な変化と体当たりの体験の仕方で教えてくれた。幼い子どもたちとの毎回の絵本の会が、「人間」についてと「絵本」についての感動と発見の場となり、子どもたちの素晴らしさに圧倒されて、「子どもと絵本」の関係をもっと深く考えたいという思いに突き動かされ、折から現象学の哲学者メルロ＝ポンティの著『知覚の現象学』に出会ったこともあり、大阪大学大学院の臨床哲学科に入学し、二度目の博士論文『メルロ＝ポンティと＜子どもと絵本＞の現象学—子どもたちと絵本を読むということ』を仕上げた。⁸ 乳幼児期の子どもたちと絵本についての根本的な関係に関心がある方は、拙著を紐解いていただければありがたい。また、現場におられる保育者の方々からさらにお教えいただけたら、一層ありがたい。

本論では、この時期のひとつの重要なテーマである「姉・兄になるとき」に絞りたい。

幼い子どもたちが、両親や祖父母の愛情をいっぱい受けて育てられてきたある日、弟や妹があかちゃんとして家族の中に登場するとわかったとき、あるいは登場したとき、人生で初めての激しい痛みを感じて味わうことになる。幼い子どもたちが、自分の後から生まれてきた弟や妹を受け入れるのは、なんと大変なことだろうと、ひとりっ子だった時の様子から大変化する姿を見て、驚愕すると共に、私も苦痛を感じるほどであった。

とりわけ、2歳で兄・姉になった場合の荒れ様は、痛々しいほどである。この年齢の場合、自分自身からだもしっかりと自分でコントロールできるまでに至っていないこと、自分のからだとかあちゃんのからだの差がまだ認識できないこと、自分自身を表現する十分な言葉を持たないこと、いい換えると、自分の身体と感情のコントロールが年齢的に未熟なために、幼い兄・姉は戸惑い、自分の感情をどう表していいのかかわからず、奇声をあげたり、誰かにぶつかったりと暴れまわることになる。おとなの目からみれば、「それまであんなにいい子だったのに、あかちゃんの誕生以来、悪いことばかりやっておとなを困らせる」ようになる。長い場合は、一年以上この状態が続くこともある。

一人の男の子は、おかあさんのおなかにあかちゃんがいるとわかった時から、母親にピタリとくっつくことになった。あかちゃんが生まれてきて、おかあさんは、彼とあかちゃんを連れて「だっこでえほんの会」にやってきたが、おにいちゃんになった彼は、できるだけ母親の膝を独占しようとし、あかちゃんを押しつけた。母親の膝は誰にも譲れない自分の場所だった。おにいちゃんが「だっこでえほんの会」を卒業すると、2番目の男の子がおかあさんに連れられてやってきた。ひとりでのびのびとしているところへ、また弟が誕生した。しかし、真ん中のおにいちゃんになった子は、大きいおにいちゃんとは違い、文庫で楽しそうに振る舞っていた。しばらくして、三兄弟は、小学生となり、やがて中学生になり、立派にそれぞれの役割を果たしている。みんな元気に自分を生きている。

ある女の子は、おとなの目から見て、ものわがりのよい子だった。しかし、あかちゃんがおかあさんのお腹のなかに宿っているとわかってから、甘えたり、ぐずったりする行動を頻繁にとるようになった。しかし、あかちゃんがこの世に誕生してしばらくすると、おねえちゃんの役割を演ずるようになった。

もう一人の女の子は、妹の誕生で見事な変身を遂げた。それまで甘えん坊だったり、気ままだったりし

たのが、あかちゃんの出現によって、「私は大きい子です」という堂々とした振る舞いをするようになった。歩き方、ものの言い方まで堂々として、自分の妹に関心をもった友だちがあかちゃんをかまいたい時には、彼女の許可がいるほどだった。威張っているという様子ではなく、落ち着いて言動する姿に感動するほどであった。この家族に3番目の子(男の子)が誕生したとき、真ん中の女の子もまたお姉ちゃんに似て、堂々とした態度で文庫にやってきた。後から絵本を考察するが、出産までの、両親の、姉・兄になる子どもへの対応の仕方に関係があるのかもしれないと思った。

しかし、幼児期のリミナリティ体験を心配することはない。子どもたちは成長したい、大きくなりたいという強い明るい向日性のエネルギーを持ち、その状況を乗り越えていく。この経験は、人生のひとつの<通過した>経験として彼らの身体に埋め込まれ、その後の人生で、生かされることになる。とにかく、姉・兄になることで、結果として(時間のかかり方はことなるが)、歩き方、話し方、他者への対応の仕方まで違ってきて、自分に自信を持って言動するようになる。

今回紹介する絵本に出会うことで、幼児期の子どもたちの心理を理解し、保育や子育ての中で活かすことができるだろう。姉・兄になる子に、極度の対応をする必要はない。問題は、こうした体験をすることができる子が減って行っていること。幼児期のリミナリティ体験は、その後の人生を生きていく上での掛け替えのない経験になるはずである。

5. 絵本の中で、姉・兄になることを経験する子どもたち

ここでは、「姉・兄になるとき」をテーマにした絵本を紹介し、考察する。姉・兄になる子と生まれてくるあかちゃんとの関係にしたがって、3つのグループに分類する。

第1グループ あかちゃんがやってくるまで

第2グループ あかちゃんがやってくる直前の時

間

第3グループ あかちゃんがやってきたあと

その1 あかちゃんなんかいらないと泣き叫ぶ姉たち

その2 あかちゃんの存在に慣れていく姉・兄たち

その3 家出する姉・兄たち

(1) 第1グループ: あかちゃんがやってくるまで

主人公が置かれている生活環境などから、親は姉・兄になる子に、あかちゃんに会うまでの新しい生活への準備をすることもある。意識的な場合もあるだろうし、無意識に行っている場合もあるだろう。こうした配慮、あるいは生活環境から、自分の弟や妹になるあかちゃんを受け入れる心とからだだが準備される。以下の3作品に登場する主人公たちは、描かれている年恰好や言動から、6歳か7歳ころと思われる。

1-1『たろうとつばき』(渡辺有一作 ポプラ社 1978年)

兄となるたろうは一年生で、生れてくる妹の名前はつばきである。1970年代の日本の、東京都に属する伊豆諸島の一つである利島が舞台。この島には住民は300人ほどだが、椿は20万本もあり、全島が椿に覆われている。椿の実を拾い、油を取るのが住民の暮らしであり収入源。そのためには子どもも働かずにはいられない。この設定のなかで、働き過ぎで倒れた母親(出産間近でもあった)は東京の病院にヘリコプターで運ばれて行く。手術ということになり、働く父親が変わって、たろうは自分から東京に行くという。小さいボート、大きい船、都電、バスに乗って、雪降る中を夜8時過ぎに病院に到着。やっと、母親に再会。そして、母親と生まれたばかりの妹と一緒に、父親の待つ利島に帰る。

こまわりや全場面の絵を使って、物語は進展する。たろうが母親に抱かれているあかちゃんに初めて会う場面はガラス越し。1ページ全体にたろうの顔が

描かれ、吹き出しで「つ・ば・き・ちゃん…… ぼくのいもうとだ……」でつぶやく。妹に会うまでの島での労働の日々、そしてひとりで東京までやってきたこと、そして家族の生活に関わる一体感とぬくもりがあれば、この時点では、嫉妬も苦悩も生じない。ひとりで東京行きを果たしたこと（道中は不安の連続だっただろう）が、彼をしてリミナリティを越えさせたといえる。

昭和時代の絵本として片づけてしまえばそれまでだが、この絵本は、現代の子どもたちが何を失ったかをはっきりと教えてくれる。生活の段取りのある暮らしである。今は家族の暮らしがない。たろうは日々の暮らしの段取りのなかで、生きていくことの厳しさ、人間関係の大切さをからだで体得している。

1-2『ゆきみち』（梅田俊作・佳子作 ほるぷ出版 1986年）

主人公は6歳くらい。弟の誕生。母親は実家に帰って出産したので、父親と一緒にバスでやってきた。外は激しい吹雪。父親は魚の鯛を持って、急いで前を歩いて行く。主人公は雪の中をそれほど早く歩けないために遅れがち。ついに父親を見失う。男の子は、みんなはあかちゃんをあやしているのだろう、ぼくのことなんてどうでもいいと思っているのだろう、「ようし、ぼく、しんでややる」と雪の上に寝転がりもするが、思い直して歩きはじめると、父親が木に結んでくれていたマフラーに気づき、がんばれと励ましてくれていることがわかり、歩いて行く。迎えにきてくれたおばあちゃんに会い、家に入る。主人公の心理が描かれているが、吹雪が非常に激しく、いかに男の子の健気さと勇気を描くためとはいえ、父親の態度は無謀ではないかと心配になる。この体験によって、父親は年上の子に兄としての自覚を持たせよう、と思っていることはわかるが、雪と吹雪の描写が激しく（父親としては、人生は厳しいのだと伝えたい面もある）、父と子の会話はなく、観念的な描写に見える。主人公の立場に立って、この絵本を読むと、設定を作りすぎていて、主人公自らが自分のリミナリ

ティを乗り越えてはいないことが見えてくる。

1-3『あかちゃんがやってくる』（ジョン・バーニンガム文 ヘレン・オクセンバリー絵 谷川俊太郎絵 イースト・プレス 2010年 イギリス 2010年）

兄になる子は5、6歳。生まれてくるあかちゃんは妹でも弟でもどっちでもいい。あかちゃんがおかあさんのお腹に宿った時からの10か月かけて、母と息子で生まれてくる子を想像するユーモアあふれる会話と絵。母子で実によく会話する。おにいちゃんになる子は、どんなあかちゃんだろうと様々に想像する。おかあさんは、あかちゃんに女の子の名前を付けようとするが、彼は男の子がいいと言う。そんなやりとりの中でも、主人公は母親に言わずにはいられない。「ママ、あかちゃんにくるなっていえないの？ うちにはあかちゃんなんかいないんじゃない？」

そして、あかちゃんが生まれた。彼はおじいちゃん和病院に行く。おじいちゃんは薔薇の花束を抱え、主人公はプレゼントの箱を抱えて。おじいちゃん（頭の毛が薄くなっている）と男の子が、おかあさんの病室にむかって歩いて行く後ろ姿がいい。「おじいちゃん、ぼくたちのあかちゃんだよ。ぼくたち あかちゃんがだいすきになるんだよ。」彼の足取りはしっかりしている。

10か月かけて、主人公はリミナリティを通過していく。最後のページの歩き方から、彼は今、おにいちゃんになったという誇り、家族の中でも大事な「兄」という役割を担うことになったのだと確信を持っていることがわかる。この絵本はあかちゃんの誕生までの間の両親と上の子との関わりの大事さを教えてくれる。あかちゃんが生まれてきたとき、両親と姉・兄になる子は、あかちゃん育てのためのパートナーシップを組む必要があるからである。

大型のしっかりした絵本。文章は絵本作家として有名はジョン・バーニンガムであり、絵は同じく有名なヘレン・オクセンバリー。二人は夫婦である。

(2) 第2グループ： あかちゃんがやってくる直

前の時間

兄・姉になる子が、あかちゃんの出現で影響を受け、現れる変化は、目の前にあかちゃんが誕生してからの方が目にみえる形ではっきりする。しかし、あかちゃんを身ごもった母親のからだの変化、抱っこしてもらえなくなること、強くぶつかると叱られること、まわりの人たちが生まれてくるあかちゃんのことを期待して、しきりに話し始めるようになることから、自分は疎外されていると感じ、不安が膨らんでいき、出産が近づくにつれて、極限に達していく。そして、今日は、おかあさんがあかちゃんと一緒に帰って来る日。その時を待つ子どもの心は、喜びよりも緊張と不安でつぶれそうになっているかもしれない。

2-1『あかちゃんのくるひ』(岩崎ちひろ作 武市八十雄・案 至光社 1970年)

4歳くらいの女の子が主人公。あかちゃんは弟。女の子は、おかあさんがあかちゃんを連れて帰ってくるのを待っている。あかちゃんが来たら何をあげようか、と自問しているが、どうも全部自分の大事な物なのであげたくはないというのが本心ようだ。あかちゃんの帽子をかぶってみるシーン(表紙にもなっている)は、彼女の不安を「あかちゃんになってみる」ということで表している。最後は、到着したあかちゃんの表情で終るが、花のような美しい彩りに囲まれた弟あかちゃんの表情は愛らしく、まっすぐな瞳で姉を見つめている。自分の大事なぬいぐるみのくまちゃんをプレゼントすることで、彼女は姉というポジションを受け入れたことを自分にも家族にも示している。

岩崎ちひろの滲んだような色彩の使い方が、女の子の心の揺れを見事に描きだしている。展開の仕方が、一本道の物語ではなく、絵と言葉による象徴的な詩のようであるために、物語に頼りがちなおとなには分かりにくい面もあるが、絵をよく見ることで、リミナリティの中にある幼い子の心理が痛いほど伝わって来る。

2-2『かわっちゃうの?』(アンソニー・ブラウン作 さくまゆみこ訳 評論社 2005年 イギリス 1990年)

主人公ジョゼフ・ケイは5歳くらいの男の子。あかちゃんは妹。ある朝、ジョゼフは、やかんがいつもと違うことに気づく。耳やしっぽがある。表紙にもなっている。気をつけてまわりを見ると、いつもと違うところがいたところにある。イメージは恐ろしく、危険なものへとエスカレートしていく。その朝、ジョゼフの父親は母親を迎えに出かけるときに「これから変わるぞ」と言ったのだ。

ジョゼフは母親があかちゃんを連れて帰ってくることを知っているが、その事実を受け入れることができない。絵本の中では、彼が両親の間でひとりっことして真ん中に写っている写真がある。今や新参ものがやってきて、彼のポジションと両親の愛情も奪うだろう。ジョゼフの心理状態は暗いイメージを次々と作り出していく。そこへ、両親が帰宅し、明るい光が家の中へ、そしてジョゼフのからだの中へと差し込む。母親はジョゼフにあかちゃんを見せながら、「ほら、あなたの妹よ」という。この絵本は、アンソニー・ブラウンの想像力豊かなイメージ力で、ジョゼフがリミナリティ期、あるいは暗いトンネルの中にいる状態を描き出している。

おとなにとっては、あかちゃんに来ることは、家族が一人増えることだが、姉・兄になる子にとっては、人生で最初で最大の事件である。ジョゼフは危険なイメージを自分の内面世界で最大限に働かせることで、乗り越えようとする。最終ページで妹を抱くジョゼフは、まだ幼く見え、ほっとしているようにも見える。おにいちゃんになることは大変なのだ。

(3) 第3グループ：あかちゃんがやってきたあと

子どもが両親と一緒に、生まれてくるあかちゃんを心待ちにしていたとしても、実際にあかちゃんが生まれてきてみると、事実は予想とは全然違ってい

たりする。とりわけ、幼い子どもたちは、あかちゃんが生まれるとすぐに一緒に遊ぶことができると思い込んでいる。ところが、生れたばかりのあかちゃんは、話すことはおろか遊ぶこともできない。むしろ両親の手間がかかるばかりだ。ここにいたって、姉・兄になった子はさびしさや見捨てられたという感情を持つようになる。両親の愛情は自分からあかちゃんに移ったのではないか、もう両親は自分のことは好きではないのではないかと不安に駆りたてられていく。

その1 あかちゃんなんかいないと泣き叫ぶ姉たち

あかちゃんの誕生により、忙しくなった両親から以前のようにやさしく対応してもらえなくなったときには、姉としてどのように対応するか。まだ、自分を他者に向かって立たせる言葉や態度を持たない場合は、自分の気持ちを表現するには、泣き叫ぶしかない。親や保育者の中には、泣きじゃくっている子に「泣いてばかりいないで、ちゃんと言葉でいいなさい」と言っている人がいるが、言葉では云えないから、泣いているのだ。あるいは、乱暴と見えることをすることもある。私は、これを「からだ語」と呼びたい。言葉ではなく、からだ全体で表現しているのだ。⁹

このグループに入る絵本では、主人公は女の子しか発見できなかった。この表現の仕方は、ジェンダーにかかわることなのだろうか。

3-1-1『あかちゃんなんかすててきて』（伊勢英子作 ポプラ社 1983年）

姉まえちゃん、2歳～3歳くらい。妹まきちゃん。絵では、おねえちゃんのまえちゃんもまだあかちゃんに見える。どんぐりを持っている終わりの方の場面では、ほおがふっくらして、どう見てもあかちゃん。おかあさんが、どんぐりはあかちゃん、大きくなったらおかあさんの木にさよならをして落ちていく、と話してくれたことで、「どんぐりも、あかちゃんだったのね」と自分を納得させようとしているのだが

心もとない。からだと言葉が、互いに拮抗し、かつ結び合っていてほしい。

3-1-2『おねえさんになるひ』（ローレンス・アンホルト文 キャサリン・アンホルト絵 吉上恭太訳 徳間書店 1998年 イギリス1995年）

姉ソフィーは4歳くらい。弟の誕生。あかちゃんが生まれるまでは楽しみに待っていたのだが、生まれてきてみれば、両親は世話のかかるあかちゃんのことばかり。たまりかねたソフィーはついにおかあさんに尋ねる。「あかちゃんはいつ帰るの。」おかあさんは、「あかちゃんはずっとここにいるのよ」という答える。ソフィーは雪が降る庭に飛び出していき、「あかちゃんなんかいない！ あかちゃんなんかもういない！」と泣き叫ぶ。そこへおとうさんが出てきて、ソフィーを大きな腕に抱きあげ、泣きじゃくるソフィーに、「ソフィー、おねえちゃんになるってたいへんなことだね」と言う。このあと、徐々に、ソフィーは、家族における自分の新しい位置を自分で獲得していく。

姉・兄になることの大変さを、あかちゃんの誕生前と後を描くことでくっきりとさせている。とりわけ、幼い子にとって、あかちゃんが到来してからの両親の態度は、理不尽な、我慢のならないものだ。その原因は「あかちゃん」にあるのだ。どの子も一度はこの疑問に突き当たる。「あかちゃんは何でくるのか」と。そこにはまだ、「自分は何で生まれて来たのか」という問いは生まれてこない。自分の誕生を問うには、10歳前後までの年月を必要とする。それには、自分にとって最初の「命ある他者的存在」になる妹や弟の誕生も影響を与えるだろう。そう考えると、最初のリミナリティ体験は、「ひとなる」上ではひじょうに重要な役割を果たしている。

その2 あかちゃん存在に慣れていく姉・兄たち

この項で登場する姉・兄になる子たちは、前項の子どもたちよりも少し年齢が高い。多分、前項のような状態の心境もあったかもしれない。それから1年以

上たち、自分の立場を受け入れつつある。

3-2-1『はじめてのおつかい』（筒井頼子文 林明子絵 福音館書店 1976年）

姉のみいちゃんは5歳。妹はすでに誕生している。おかあさんは忙しく、あかちゃんはベッドで泣いている。みいちゃんはこの状況の中で、はじめてのおつかいに出かける。緊張しているので転んでお金を落としたり、お店で「ぎゅうにゅうください」と大きな声で言えなかったり、おつりを忘れてしまったけど、無事におつかいをする事ができた。

この絵本のテーマは「ミルク」であり、ミルクはお母さんの愛情でもある。ベビーベッドで泣いているあかちゃんはミルクを欲しがっている。そこで、みいちゃんは初めてひとりでミルクを買いに行く。裏表紙で、必要以上に大きな絆創膏を膝に貼ってもらったみいちゃんは、もうおかあさんの膝には座れないが、足をおかあさんの膝にそっと乗せている。みいちゃんは、あかちゃんと同じようにミルクを飲むと言う行為を通して、私もおかあさんの大事な子なのだと確認している。しかも、このミルクは、わたしが買ってきたものなのだ。リミナリティを越えて、みいちゃんは、この時、母親の愛情を確認し、家庭における新しいポジションを得たことになる。それは、あかちゃんなんか問題にならないくらい、うれしく誇れることなのだ。

筒井頼子の文と林明子の絵になる姉妹の物語はこの後『あさえとちいさいいもうと』、『いもうとのにゅういん』と続く。こう見てみると、姉の成長物語は、1冊ずつ、完結してはいるが、これら3冊の絵本を通して語られることになる。

3-2-2『ちょっとだけ』（瀧村有子文 鈴木永子絵 福音館書店 2005年）

主人公のなっちゃんは5歳くらい。あかちゃんの妹がいる。なっちゃんは、おかあさんがあかちゃんの世話で忙しいのを見て、自分はなるべくおかあさんに手をかけてもらわなくてもすむようにしようと

努力する。冷蔵庫から重いミルクのパックをとり出して、自分のガラスのコップに注ぐ。ちょっとこぼれるが、ミルクはコップにもちょっとだけ入る。朝は髪をとかしてもらって、二つのおさげにくくってもらっていた。彼女は今までおかあさんにやってもらっていたことを思い出しながら、自分でやってみる。ちょっとだけ上手にできた。夜パジャマに着替えるときも、初めて自分でボタンをはめてみた。ボタンの掛け違いがあるが、ちょっとだけ上手にできた。なっちゃんは、おかあさんに世話をかけないようがんばり、ちょっとずつ自分でできるようになっていく。

彼女のひたむきさ、けなげさは、日本の人たちの心情に訴えるものがある。彼女の我慢強さや頑張り、日本のおとなの賞賛に値するところだが、ひたすら忍耐している姿は、いたいけないし、自分で言いたいことは言いなさいと言いたい気持ちにもなる。しかし一方、与えられた試練の時を自分のために最大限利用し、身の辺のことを自分の手で成し遂げて自立する姿勢は貴重である。ただ、この後、我慢して、健気なだけの女性になってもらっては困るので、リミナリティ期の過ごし方を考える必要もある。いつか本当に自立した女性になってほしい。

3-2-3『ぼくんちのかいじゅう』（リチャード・グラハム文 スーザン・バーレイ絵 おびかゆうこ訳 ほるぷ出版 1990年 イギリス 1988年）

主人公のジャックは4才くらいで、3人兄弟の真ん中。そして、かいじゅうがいる。大きいにいさんの名前はヘンリー。ジャックは、泣いたりわめいたり、うるさくてみんなを困らせてばかりいるかいじゅうがいやでたまらない。しかし、ある日、ジャックは、かいじゅうがかわいい弟のジョージだと気が付く。

兄弟の真ん中であるために、自分がかって、大きいおにいちゃんにとっては「かいじゅう」だったかどうかとも気が付いたのではないか。すなわち、他者のことも、自分のことも、対象化できたのではないか。兄弟姉妹は最初の他者と言われるが、社会に出る前に、

競争相手であり、愛と憎悪を感じ合う相手が身近にいるという体験は、貴重である。本論では、姉・兄になる立場からの絵本を選んだが、絵本の中には、妹・弟側からの作品もある。ただ、姉・兄になる側からの方が、内容が濃く、深く、深刻なものが多い。それほど姉・兄になることのリミナリティ体験は大変なものだと言える。

絵を描いているスーザン・パーレイは、日本でも評判の絵本『わすれられないおくりもの』の作者でもある。この絵本は、人の最後のリミナリティである「死」を扱っている。自分でどのように死を迎え、周りの人と別れるかという時の見事な身の処し方をアナグマが示してくれる。

その3 家出をする姉・兄たち

あかちゃんがやってきたために家出をする姉・兄たちは、6歳くらいになっている。自分で決断し、自分で準備をし、家出をする。自分がこの家にはもういたくないということを両親に知らせるために取る行動である。それができるのは、言葉もしっかり話せて、ある程度文字を読み、書くことができ、なによりも自分で考えることができる年ごろであると言える。従って、この子たちは、リミナリティ期を自分の力で解決しようとしている。結局は、また両親のもとに帰ることになったとしても。かれらの年齢では、まだひとりで生きていく力はないことは、本人が一番よく知っている。

3-3-1 『ごきげんなすてご』（伊東寛作 徳間書店 1995年）

姉は6歳くらいで、弟が誕生する。言葉も書かれているが、線描による漫画的な絵が主人公の内面を物語っている。色は赤だけが主人公の女の子の髪の毛のリボンやほっぺたなどに使われている。

あかちゃんが家にやってきたので、面白くない主人公は家出するという果敢な行動に出る。段ボールを拾ってきて、箱に「ごきげんなすてご」と大きく書いて、中に座りこむ。拾ってくれる新しいおとうさん

もおかあさんも、私だけをかawaiiがってくれることが大事。あかちゃんなんか絶対にいない。彼女は段ボールの箱のなかで待ち続けるが、みんな通り過ぎていく。最後にあかちゃんを抱いた男の人と女の人がやってきて、彼女に尋ねる。「このあかちゃんのおねえさんになってくれませんか」彼女は小さい声で「うん」と答え、両親とあかちゃんのいる家へと帰っていく。

112ページというページの多さから、また見開き（開いた左右のページ）の絵は、一つの場面として構成されていないこと、絵は白黒の単純な線描であることから、この作品を絵本というカテゴリーに入れていいかどうか疑問は残る。しかし、文と絵が一体となって物語を展開させていることにより、絵本として取り上げたい。家出という深刻な内容を、ドライな、シンプルな絵の表現方法と言葉により、子どもたちの共感を得る方法で伝えている。主人公と同じか少し年上の子どもたちと読んで会話をすることが可能な作品である。本当に家出がしたいと思っている子もいるだろう。作品世界のなかで家出の想像体験することは、今の子どもたちに必要なことかもしれない。

この作品では、主人公は結果として現実を受け入れるが、ただ我慢するのではなく、思い切りのよい行動を自らとることによって、自分をコントロールし、自らの意思で現実に立つことを選ぶ。からりとしたりリミナリティ体験である。

3-3-2 『とおいところへいきたいな』（モーリス・センダック作 神宮輝夫訳 富山房 1978年 アメリカ 1957年）

兄マーチンは6歳くらい。あかちゃんは弟か妹か、絵からはわからない。マーチンは、あかちゃんの誕生で自分の話をちゃんと聞いてくれない母親のところから家出して、ねこやスズメや馬が話をする「とおいところ」に行くが、時を見計らって帰宅する。おかあさんが、あかちゃんの世話を終えたら、自分の話を聞いて、質問に答えてくれるとわかって

いるから。ここでは、言葉を通して通じ合える母子関係が存在する。

この絵本の作者はアメリカのモーリス・センダックである。センダックの代表作である『かいじゅうたちのいるところ』は、絵本の歴史のなかで、子どもの心理を描いた最初の作品であり、最高の作品である。『かいじゅうたちのいるところ』では、主人公のマックスがなぜ大暴れをするのかは書かれていないが、その6年前に出版された『とおいところへいきたいな』から推測すると、弟か妹の誕生により、母親の愛情があかちゃんに移ったと思いついでいる兄の行き場のない怒りから生み出された想像力とエネルギーということが出来る。

姉・兄になるときのリミナリティ体験が、絵本の名作を生み出している。センダック自身には、姉、兄がおり、妹や弟はいないが、子どもの時代になんらかの心理的な危機(リミナリティ)を体験しており、その体験が、おとなになっても生き続け、作品を生み出す源泉になっていると言えるだろう。

3-3-3『フランシスのいえで』(ラッセル・ホーバン文
リリアン・ホーバン絵 松岡享子訳 好学社 1972
年 アメリカ1964年)

姉のフランシスは6歳くらいで学校に行っている。妹のグローリアが誕生する。あかちゃんが生まれたために、思い通りに行かず、面白くないフランシスは家出をすることにする。ホーバン夫妻の『フランシスのいえで』は、あなぐま一家で描かれている。家出を決意したフランシスは、リュックに食べ物などを詰めて、家出先である食道のテーブルの下に陣取る。「そこなら、ビスケットが足りなくなってもすぐに調達できるから」というのが家出先決定の理由。その近くの居間のソファに両親が座り、会話している。あなぐまのおとうさんとおかあさんは、見事な連携プレーの会話のなかで、フランシスがどんなに素晴らしい子であるか、あかちゃんの妹もこんなおねえちゃんを持ってどんなに幸せであるかを話し合う。もちろん、フランシスはちゃんと聞

いており、自分で帰宅する方法を工夫し、大好きな自作の歌を歌いながら帰還を果たす。

フランシス・シリーズの最初の作品『おやすみなさいフランシス』のときは、フランシスはまだ幼く、一人っ子。そこに妹が誕生し、家出することになる。『フランシスとたんじょうび』では、妹の誕生日であるために面白くない。『フランシスのおともだち』では、まだ小さいから一緒に遊べないと思っていた妹が、意外なことができることを知り、一緒に遊ぶようになる。という具合に、フランシス・シリーズの中で、妹を対等の相手として見直していく、姉妹の成長物語になっている。この間、フランシスは幾度かの試練(リミナリティ)に直面する。

3-3-4『ピーターのいす』(エズラ・ジャック・キーツ
作 木島始訳 偕成社 1969年 アメリカ1967年)

ピーターは6歳くらい。妹のスージーが誕生。キーツの『ピーターのいえで』は、キーツの連作ピーター・シリーズの3作目で、最初の作品『ゆきのひ』の時には、ピーターは3歳くらい、次の『ピーターのくちぶえ』では4、5歳になり、この作品では、6歳くらいになり、妹が誕生する。彼のものだった青いベビーベットや子ども椅子が、自分にはなんの断わりもなく、おとうさんの手でピンクに塗り替えられていくのを見て、ピーターはこの家には自分の居場所がなくなると考え、盟友である犬のウイリーと共に家出をすることに決める。ウイリーは骨を加え、ピーターはまだ塗られていない小さい椅子を抱えて、家の前に家出。そして、自分の「あかちゃん用の椅子」に座ろうとしたとき、ピーターは気づく。自分がその椅子に入りきらないほど大きくなっていったことを。

この絵本は、主人公が、自分は成長しているのだということ、そして人生の新しい位置に到達しているのだということ、自分自身で知る瞬間を見事にとらえた作品である。自分のものであった椅子に自分のからだがおさまりきれないと自分のからだを通して知ったとき、ピーターはこれまでの家族におけ

る「あかちゃん」のポジションを捨て、「あかちゃん」役はスージーに譲り、自分はおにいちゃんになることにする。実に見事にリミナリティ期を乗り越える。

キーツの作品のなかでは、子どもたちは成長していく。『ピーターのがみ』ではガールフレンドができ、『ピーターのめがね』では、街の大きい子たちから喧嘩を売られそうにもなる。『にんぎょうしばい』では、あかちゃんだったスージーが、小さい子たちに人形劇を演じて見せる立場になり、地域のリーダー格に成長している。

ピーター・シリーズは、絵本の世界で初めて黒人の少年を主人公に据えて成功した画期的な作品であった。登場しているおとなたちが、ピーターの両親も含めて、子どもたちがリミナリティ体験を越えていくところを、さりげなく手助けしている。

3-3-5 『Running away from home』 (Pictures by Nigel Gray, Story by Gregory Rogers, Andersen Press, London, 1995. 日本語訳出版なし。「ぼく、いえでする」(仮))

6歳くらいの少年サムが主人公で、上に大きい兄がいる。弟が誕生している。文章が長いが、主人公のサムの気持ちをよく表現している。絵の中では、あかちゃんがはっきりと描かれているが、文章ではあかちゃんは登場せず、父親との対決という書かれ方で、この年頃の男の子の心理が描かれている。サムには兄への憧れもあり、サムにとって、兄は成長のモデルとも言える。兄弟3人の真ん中の男の子のジレンマと成長の物語でもある。

この絵本は、男の子と父親の物語でもある。サムの葛藤は、ただ単に、あかちゃんの影響を受け入れて、家庭における自分の位置づけを確かなものにするには留まらず、これまでは父親に従順に従っていた男の子だけど、これからは違うぞという心意気がある。ぼくは大きい子なんだと考えるようになった背景には、自分では気づいていないが、あかちゃんの誕生がある。

他の絵本が、家庭にあかちゃんが出現したことにより、それまでの居心地の良いひとりっ子としての位置を追われ、姉・兄になるために危機的なリミナリティ期を過ごし、やがて、家庭の中で新しいポジションを得て落ち着くものに対して、この絵本では、主人公は自立していくものとして描かれている。リアリズムの絵がサムと父親の表情をよく捉えている。

本論では、日本語で出版がされている絵本からのみ選ぼうとしたが、この絵本に匹敵する内容と絵の作品は見つけれず、取り上げることにした。

6. おわりに

こうして、1冊ずつの絵本を見てくると、それぞれの絵本の中で、ひとりひとりの主人公たちは、それぞれのやり方で精いっぱい、自分の人生のリミナリティ期を通過しようとしていることがわかる。これらの絵本にあらわれる子どもたちにとっては、リミナリティ期は「敷居」よりも「トンネル」という方がもっと適切なメタファーであることもわかる。子どもたちは、知恵と勇気を持って、時には「暗いトンネル」を通りぬけようとしている。

子どもたちを、「兄・姉になるとき」というリミナリティの3段階の中においてみると、第一段階の「分離」では、あかちゃんが家に来たときで、両親から（家族全員から）疎外されたような、捨てられたような気持ちになる。第二の段階の「通過、狭義のリミナリティ」で、子どもたちはトンネルに入り、時には、暗いトンネルを手探りで、時には恐さで身動きができなくなったり、時には転んだり、ときには想像力の助けを借りて、通り抜けようとする。第三の段階の「再統合」で、子どもたちは何とかトンネルを抜け出て、家族の中での新しいポジションを獲得する。

この第二段階が非常に危険な時期で、自分でも自分が何者なのかわからなくなる。本論のテーマに関して言えば、自分は一人っ子でもないし、姉や兄にもなっていない、という宙ぶらりんの状態である。3歳までの子どもたちであれば、泣き叫ぶしかない

かもしれない。6歳くらいになると、家出したくなる。どの年齢の子も、その子のやり方で、まわりのおとなたちに助けられて、帰還を果たした「再統合」の暁には、第一段階よりも高いポジションに位置するようになる。自分に誇りを持ち、両親ほかの人たちから、その位置にふさわしい対応をしてもらえるようになるのだ。

纏めると、家族の中の、みんなから愛情をひとり占めしていた子どもから、あかちゃんが生まれたことによって兄・姉になること、すなわち、一つの状態から、もう一つの状態へと変化すること、それは、どっちつかずの「さなぎ」のように籠った状態から、脱皮して、蝶となって羽化することに似ているかもしれない。しかし、人の子は、両親やまわりの人たちにも支えられて、自分をコントロールし、兄・姉であることを受け入れたときには、人生途上にある「敷居」のひとつを越え（あるいは、トンネルをくぐりぬけ）、新しい世界に足を踏み入れたことになる。この通過期をリミナリティ期と呼ぶ。

哲学者のメルロ＝ポンティは、その著書『幼児の対人関係』のなかで、「最初の自我は、可能的あるいは潜在的自我、つまり自分が絶対に他と異なるものだというをまだ知らない自我なのです。」と書いているが、¹⁰ この状態は3歳前を指しており、自分自身がまだ確立していないため、言い換えれば、自分のことをまだ<わたし>と言い切ることができない時期のことである。そして、「ひとなって」いくと、次のようになる。

幼児は三歳ごろになりますと、これまでみた癒合的社会性の段階のときとは違って、自分の身体ばかりか思考をさえ他人のものだと思ふようなことはやめます。彼は自分を、<状況>そのものと混同したり、また自分に負わされることもありうる<役割>そのものと混同したりすることがなくなります。彼は自分固有の視点やパースペクティブというものを採用するわけです。いや、むしろ彼には、状況や役柄がどれほどの多様性をもって

いようとも、自分はそうしたさまざまな状況やさまざまな役柄を越えた<ある何者か>だということがわかってくるのです。¹¹

メルロ＝ポンティは、自分の視点やパースペクティブを持ち、自分の状況や役割をきちんと理解し、自分は自分であるという自我を持てるのは、3歳を越したぐらいからだと書いている。長年子どもたちに関わってきたものとして、確かに3歳半ころに飛躍があり、それまで、〇〇ちゃんはね、と自分のことを指していた子どもが、<わたし>という代名詞でしっかりと自分のことを話せるようになる。足腰もしっかりして、自分のからだを自分の意思と体力で動かせるようになる。そして、誕生からこれまでの経験があったところに、姉・兄になるときというリミナリティがやって来る。この時、両親やおとなが上手に支えてくれると、第一段階から第三段階へと通過することができるだろう。

発達心理学者である岡本夏木は『幼児期—子どもは世界をどうつかむか—』のなかで、次のように書いている。

「生きる」ということ、「生活する」ということとの中心課題、それは、人間が「自己実現」と「他者との関与」（コミットメント）という、二つの側面をどう統合して生きるかということにあると思います。¹²

「姉・兄になるとき」というのは、幼児期の子どもたちが、初めて、自分の生き方をしたいという思いと、他の人たちと共に生きなければいけないという思いとの間の深刻な葛藤を体験するときである。そして、このことこそが、「生きる」ために学ばなければならない最初のそして最大の課題である。リミナリティの第三段階が、「再統合」であるが、「生きる」ということは、生れた時から、命の炎が消える時まで、「自己実現」と「他者との共存」という二つの側面を何度も統合していく過程である。すぐ

れた絵本は、絵と言葉の統合を通して、「生きる」ことの意味を表現している。

本論では、子どもたちと読む絵本ではなく（読める絵本もあるが）、子どもたちの内面世界を理解するためのひとつの手だてとしての絵本に焦点を当てた。絵本は「言葉」と「絵」とめくることから生じる「物語」から成り立つトータル・デザインであり、総合芸術である。めくることから時間の経過が生じ、ドラマのある物語が生まれる。リミナリティを表現するためには、第一段階、第二段階、第三段階という時間の経過を描写する必要があり、姉・兄になるときの子どもたちの心理の変化を時間を追って描き、最後には、子どもたちは、自分の居場所を再発見するが、その時には、絵本の最初の段階、すなわち第一段階ではなく、もっと高い位置へと昇格しているのである。

参考文献

第1次参考文献 絵本

<日本>

伊勢英子作『あかちゃんなんかすてきて』 ポプラ社

1983年

伊東寛作『ごきげんなすてご』 徳間書店 1995年

岩崎ちひろ作『あかちゃんのくるひ』 武市八十雄・案

至光社 1970年

梅田俊作・佳子作『ゆきみち』 ほるぷ出版 1986年

鈴木永子絵『ちよっとだけ』 瀧村有子文

福音館書店 2005年

林明子絵『はじめてのおつかい』 筒井頼子文

福音館書店 1976年

林明子絵『あさえとちいさいもうと』 筒井頼子文

福音館書店 1979年

林明子絵『もうとのにゅういん』 筒井頼子文

福音館書店 1983年

渡辺有一作『たろうとつばき』 ポプラ社 1978年

<アメリカ>

キーツ、エズラ・ジャック 作『ピーターのいす』

木島始訳 偕成社 1969年（アメリカ1967年）

キーツ、エズラ・ジャック 作『ゆきのひ』

木島始訳 偕成社 1969年（アメリカ1962年）

キーツ、エズラ・ジャック 作『ピーターのくちぶえ』

木島始訳 偕成社 1974年（アメリカ1964年）

キーツ、エズラ・ジャック 作『ピーターのながみ』

木島始訳 偕成社 1974年（アメリカ1968年）

キーツ、エズラ・ジャック 作『ピーターのめがね』

木島始訳 偕成社 1975年（アメリカ1969年）

キーツ、エズラ・ジャック 作『にんぎょうしばい』

木島始訳 偕成社 1977年（アメリカ1975年）

センダック、モーリス 作『とおいところへいきたいな』

神宮輝夫訳 富山房 1978年（アメリカ1957年）

センダック、モーリス 作『かいじゅうたちのいるところ』

神宮輝夫訳 富山房 1975年（アメリカ1963年）

ホーバン、リリアン 絵『フランシスのいえで』

ラッセル・ホーバン・文 松岡享子・訳 好学社

1972年（アメリカ1964年）

ウィリアムズ、ガース 絵『おやすみなさい フランシス』

ラッセル・ホーバン文 松岡享子訳 福音館書店

1966年（アメリカ1960年）

ウィリアムズ、ガース 絵『ジャムつきパンとフランシス』

ラッセル・ホーバン文 リリアン・ホーバン絵

松岡享子訳 好学社 1971年（アメリカ1964年）

ウィリアムズ、ガース 絵『フランシスとたんじょうび』

ラッセル・ホーバン文 リリアン・ホーバン絵

松岡享子訳 好学社 1972年（アメリカ1968年）

ウィリアムズ、ガース 絵『フランシスのおともだち』

ラッセル・ホーバン文 リリアン・ホーバン絵

松岡享子訳 好学社 1971年（アメリカ1969年）

<イギリス>

アンホルト、キャサリン 作『おねえさんになるひ』

ローレンス・アンホルト・文 吉上恭太・訳

徳間書店 1998年（イギリス1995年）

オクセンバリー、ヘレン 絵『あかちゃんがやってくる』

ジョン・バーニンガム文 谷川俊太郎訳

イースト・プレス 2010年（イギリス2010年）

バーレイ、スーザン 絵 『ぼくんちのかいじゅう』
 リチャード・グラハム・文 おびかゆうこ・訳
 ほるぷ出版 1990年(イギリス1988年)

バーレイ、スーザン 作『わすれられないおくりもの』
 小川仁央訳 評論社 1986年(イギリス1984年)

ブラウン、アンソニー作 『かわっちゃうの?』
 さくまゆみこ訳 評論社 2005年
 (イギリス1990年)

Rogers, Gregory (pictures), Running away from home.
 Nigel Gray (text). Andersen Press, London. 1995

第2次参考文献 研究書

岡本夏木 『幼児期—子どもは世界をどうつかむか—』
 岩波書店 2005年

正置友子 『メルロ＝ポンティと<子どもと絵本>の現象
 学—子どもたちと絵本を読むということ』風間書房
 2018年

ジュネップ、A. V. 『通過儀礼』秋山さと子・彌永信美訳
 新思索社 1997; Gennep, Arnold Van. Les Rites de
 Passage, Étude Systématique des Rites. Émile
 Nourry, Paris, 1909; (英語版) Gennep, Arnold Van.
 The Rites of Passage. Translated by Monika B.
 Vizedom and Gabrielle L. Caffee.
 Introduction by Solon T. Kimball. The University of
 Chicago Press, Chicago. 1960

ターナー、V. W. 『儀礼の過程』富倉光雄訳 新思索社
 1996; Turner, Victor W. The Ritual Process:
 Structure and Anti-Structure. With a Foreword
 by Roger D. Abrahams. Aldine Transaction. New
 Brunswick (U.S.A.) and London (U.K.), 1969.
 Second printing 2009

ターナー、ヴィクター 『象徴と社会』梶原景昭訳
 紀伊国屋書店 1981; Turner, Victor W. Dramas,
 Fields, and Metaphors: Symbolic Action in Human
 Society. Cornell University Press, Ithaca and
 London, 1974

メルロ＝ポンティ、モーリス 『知覚の現象学』
 竹内芳郎ほか訳 みすず書房 第1巻1967年

第2巻1974年

メルロ＝ポンティ、モーリス 『幼児の対人関係』
 滝浦静雄訳 みすず書房 2001

注

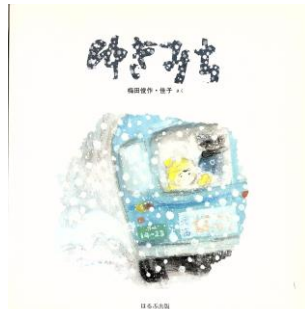
- 1* ターナー (1981) p. 210
 2 ジュネップ (1997) p. 9
 3 ジュネップ (1997) p. 16
 4* ターナー (1996) pp. 125-6
 5* 論文 A History of Victorian Popular Picture Books
 は、イギリス国立ローハンプトン大学大学院に提出し、
 博士号を授与された。ヴィクトリア時代の絵本の研究
 は、イギリスおよびアメリカの研究者によっても本格的
 にはされたことはなく、この論文が世界で初めての本格的
 的研究として、イギリスの子どもの本歴史協会より、栄
 誉ある「ハーベイ・ダートン賞」を受賞。日本で、英文
 のまま、また大英図書館、オクスフォード大学図書館等
 からの多数の図版も入れて、2006年に風間書房より出版
 されている。
- 6* 西鉄バスジャック事件、大分一家殺傷事件、山口母
 親殺害事件などが2000年に発生している。
- 7* 「ひとなる」は、尾張三河地方の方言であり古語で
 ある。広辞苑にも「ひとなる」は入っており、「人成る」
 の漢字が当て嵌められている。しかし「ひとなる」は、
 「人」だけではなく、キュウリやナスビやトウガンなど
 にも使われ、生命あるものに関わる言葉である。名古屋
 で生まれ育った私にとって、祖母が良く使っていた生き
 ている言葉であり、「発達」よりも身体性のあるぬくもり
 を感じ、使うことにしている。
- 8* 『メルロ＝ポンティと<子どもと絵本>の現象学—
 子どもたちと絵本を読むということ—』(風間書房
 2018年)
- 9* 「からだ語」と言う言葉を考え付いたのは、「だっ
 こでえほんの会」での子どもたちのお付き合いからで
 ある。無論、言葉で表現することは大切なことである。
 しかし一方で、保育者や教師が、子どもたちの「からだ
 語」を読み取れるようになると、もっと子どもたちの内
 面世界を読むことができ、子どもたちを理解できるよう
 になり、対処も出来るようになるに違いないと考えてい
 る。「からだ語」はジェスチャーとは異なり、もっと素朴
 で、無意識の層も自ずから表している。おとなであって
 も、言葉はきれいごとであっていても、顔の表情がその
 人の意識的、無意識的な層を表していることがある。
- 10* メルロ＝ポンティ (2001) p.46
 11* メルロ＝ポンティ (2001) p.107
 12* 岡本夏木 (2005) p.27

<姉・兄になるとき>をテーマとする絵本の考察で紹介した絵本

第1グループ：あかちゃんがやってくるまで



1-1 『たろうとつばき』
渡辺有一作 ポプラ社 1978年



1-2 『ゆきみち』
梅田俊作・桂子作
ほるぷ出版 1986年

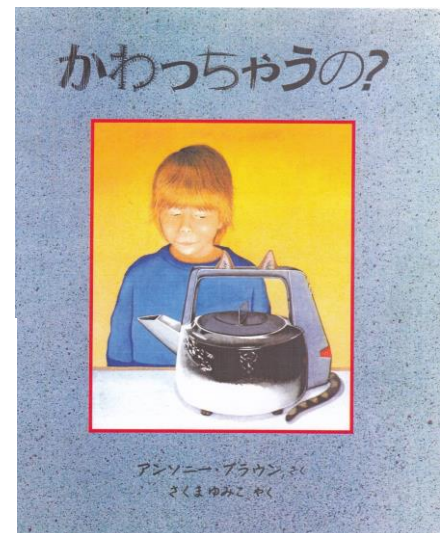


1-3 『あかちゃんがやってくる』
ジョン・バーニンガム文
ヘレン・オクセンバリー絵
谷川俊太郎訳 イースト・プレス
2010年 イギリス 2010年

第2グループ：あかちゃんがやってくる直前の時間



2-1 『あかちゃんのくるひ』
岩崎ちひろ作 武市八十雄・案
至光社 1970年



2-2 『かわちちやうの』
アンソニー・ブラウン作
さくまゆみこ訳
評論社 2005年
イギリス 1990年

第3グループ：あかちゃんがやってきたあと

その1 あかちゃんなんかいないと泣き叫ぶ姉たち



3-1-1 『あかちゃんなんてすててきて』
伊藤英子作 ポプラ社 1983年



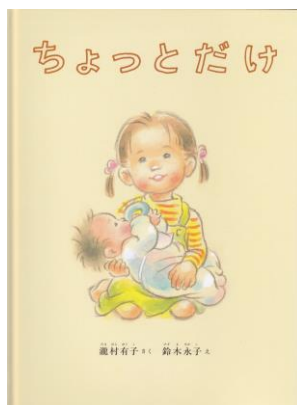
3-1-2 『おねえさんになるひ』
ローレンス・アンホルト文
キャサリン・アンホルト絵
吉上恭太訳 徳間書店 1998年
イギリス 1995年

第3グループ：あかちゃんがやってきたあと

その2 あかちゃんの存在に慣れていく姉兄たち



3-2-1 『はじめてのおつかい』
筒井頼子文 林明子絵
福音館書店 1976年



3-2-2 『ちよつとだけ』
瀧村有子文 鈴木永子絵
福音館書店 2005年



3-2-3 『ぼくんちのかいじゅう』
リチャード・グラハム文
スーザン・バーレイ絵
おびかゆうこ訳 ほるぷ出版
1990年 イギリス1998年

その3 家出をする姉兄たち



3-3-1 『ごきげんなすてご』
伊東寛作 徳間書店 1995年



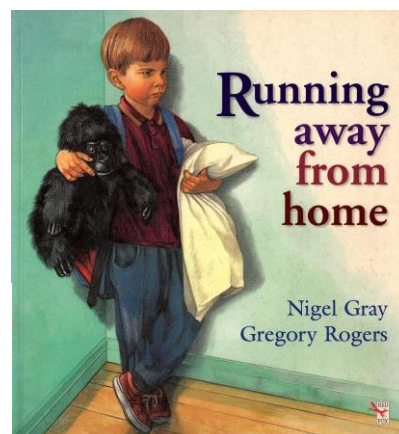
3-3-2
『とおいところへいきたいな』
モーリス・センダック文
神宮輝夫訳 富山房 1978年
アメリカ1957年



3-3-3 『フランスのいえで』
ラッセル・ホーバン文
リリアン・ホーバン絵
松岡享子訳 好学社 1972年
アメリカ1964年



3-3-4 『ピーターのいす』
エズラ・ジャック・キーツ文
木島始訳 偕成社 1969年
アメリカ1967年



3-3-5 『Running away from home』
Pictures by Nigel Gray,
Story by Gregory Rogers, Andersen
Press, London, 1995.

A Study on the First Experience of Liminality for Young Children —Focusing on picture books that depict young children becoming big sisters and brothers —

Masaki Tomoko*

Abstract

Through life we experience not only happiness but also hardships. Living through one life from birth to death, we have to pass many “limen” (“threshold” in Latin). We call these passages from one stage to another, or from one age to another, “liminality”. Liminality is a rite of passage that consists of three stages: separation, margin (or “limen”), and aggregation.

When young children who have been brought up affectionately by their parents and grandparents have a baby brother or sister, they are struck by their feeling of loss. The change from being the only child to being the big brother or sister is very difficult. This transitional period can be called a period of liminality. The process of liminality here means that young children in this period can neither be the center of attention nor be proud of being an older sibling. However, once they are capable of understanding their new position, they can cross over the threshold or, get through a tunnel, and they will emerge from their ordeal.

In this paper I would like to concentrate on picture books that depict very young children becoming big sisters and brothers.

Key words: picture books, liminality, trial, becoming big sisters and brothers, psychology of young children

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Masaki Tomoko
〒590-0075 2-3-20 minamihanada-cho, Sakai-ku, Sakai City, Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Welfare
E-mail : tomoko-m@fk9.so-net.ne.jp